稲葉ゼミナール新書レポート

180781060　渥美俊介

本書：バチカン近現代史　　**出版**：中公新書

バチカンの生き残りをかけた 200 年を綴った本であるが、最初の試練となるのが「フランス革命」である。フランスとは革命以前良好な関係であったが仏軍の侵攻や教皇逮捕をきっかけにバチカンやカトリックの様々な特権がはく奪されていく。ナポレオンの支配によって蹂躙され続いたが、1813 年を機にフランス革命の支配は収束した。だが改革後のバチカンを巡る五大国会議があり、教皇領を巡るオーストリアとフランスの対立が起きていた。当時仲介の立場であったイギリスだが、両国の睨み合いが激化し、結局教皇が中立の立場に当たった。超保守主義時代であったバチカンはグレゴリウス 16 世により内政は惨憺たるものであった。

イタリア王国統一が絡む時代に新教皇となったピウス 9 世は人々から非常に親しまれていた。ピウス 9 世はイタリアの統一目指し、民法の制定、「言論の自由」を称した新聞・雑誌の刊行し、近代化政策を進めていった。しかし、ピウスは新憲法を始め多くの問題点を市民に抱かせ批判が集まるようになる。様々な政策を実行していったが、「バチカンの囚人」と称してイタリアを断交したりして亡命していった。バチカンは孤立回避を図るため、オーストリアを頼ったが三国同盟を締結されたため希望は閉ざされた。

孤立状態となったバチカンはレオ 13 世により状況打破を試みていた。欧米との外交を積極的に展開していった。次いでベネディクト 15 世は平和のためにイタリア政治に介入し、平和のために公司を務めた。

第一次大戦後、ムッソリーニがサントゥイッチを通じてバチカンと深い関係を持つ。1929 年にはガスパリ国務長官との間で条約を結び、カトリックはイタリア唯一の国教とされバチカン市国が独立した。1933 年にはナチス・ドイツと条約を結んだが、ヒトラーが首相時にナチスに影響され、バチカンはユダヤ人大量虐殺に関与した。バチカンは第二次世界大戦に巻き込まれていき、脅威のソ連を恐れに対抗するためにドイツを支援せざる負えなかった。バチカンはファシズムやナチズムが共産主義の対抗として頼りになる存在であった。また冷戦中は反共産主義の牙城であり、イデオロギーの拠り所として重視されていた。

一方、反共産主義の反面から米国との関係が深まっていく。決して有効な関係ではなかったが、ピウス 12 世の後継者のパチェッリ国務長官とルーズベルト大統領との間は親密な関係が続いていた。バチカンは第二次世界大戦の拡大を危惧し、米国に外交特使として要請したテイラーは徐々に二国間の距離を縮めていく存在となる。ピウス 12 世による反共産主義の考えはイタリア総選挙で高投票率という部分で影響が出ていた。米国とバチカンは正規の国交はなかったが、文化外交という面では関係は不可欠であった。

第二次バチカン公会議の開催目的としては、教会の分裂やユダヤ教会との対立を解消・和解することで会期は四つに分けられた。第一期には新教皇の選出、第二期には憲章・教令が成立、第三期は多くの草案が成立、第四期にはシノドスの宣言が大きくニュースになった。第二バチカン公会議にはパウロ 6 世が大きく関わっていた。外交を担う中レジスタンスの保護など様々な実績を残していたため、次期教皇候補とされていた。公会議ではカトリック教会による反ユダヤ教を解消しようと取り組んだ。また公会議では戦争や平和についても議論が飛んだ。第四期の頃からバチカンは国連との関与を強化し、国際情勢に敏感に反応し人種差別・性差別の問題に立ち向かう今日のバチカンの姿が見られた。

バチカンは独自の対共産圏外を追い求めていた。パウロ六世はまず「東方政策」を掲げ、東ヨーロッパ諸国との関係正常化・緩和を図ろうとしていた。次にユーゴスラヴィアとの国交正常化を進めた。また人権を用いた外交戦略としてヘルシンキ会議がある。パウロ六世は深刻な国際的情勢に対して心を痛めている一方、和平を模索していた。ベルリンの壁崩壊までの道程で教皇初となるポーランド人のヨハネ・パウロ二世の挑戦が始まった。教皇に即位するとラテン・アメリカやソ連、よるとの外交に着手し、左翼勢力にも厳しい態度で臨んだ。時には母国ポーランドでは社会的不安が残されている中で困難に立ち向かうが、実行力が評価されていった。唯一来日した教皇とも知られるヨハネは対等な外交関係の回復を常に考えていた。

グローバル時代にいる今日では教皇は様々な問題に対応していた。同時多発テロでは良好な関係が続いている米国を攻撃されたが、神を信じるものとしては反イスラムの立場をとらなかった。バチカンは様々な局面で対立回避を訴えたのである。2013 年には基本的には終身制である教皇職をベネディクト 16 世は退位宣言をし世間を驚かせた。その反面教皇交代後に性的虐待、マネー・ロンダリングに関与の二つに批判を浴びていた。その後フランシスコという初のイエズス会出身の教皇が即位した。フランシスコは様々な批判や課題に取り組むオーブンな政策が期待されている。

バチカンは、時には前近代的な頑迷な態度で近代化と対立しながらも自らの役割に真摯に取り組んできた。様々な困難が直面する中で、歴代の教皇が対処してきた。「二十世紀最大の悪」とまで言われるようになったファシズムやナチズムとバチカンとの協定関係は「近代化」と向き合う一つのプロセスであった。バチカンという国は反共産主義を常に掲げていたが、冷戦時代に共産主義圏である東側と直接対話ができた数少ない組織でもある。だが最大の成果は武器に頼らずに共産主義を倒したことである。

近年、軍事・戦略的なｂードパワーに焦点を当てる国際関係の研究だけではなく、宗教や文化などのソフトパワーに焦点を当てる研究が盛んである。そうした意味でもバチカンという小さい国に注目すべきであろう。